

全体会議（分科会報告）

第Ⅰ分科会〈現代教化学部門Ⅰ〉

五十年後のお題目を考える

座 長 岩田親静

問題提起 大乘文晴

助言者 中村潤一

記 録 古河良啓

運 営 小瀬修達

〈概要〉

第Ⅰ分科会では、五十年後の将来を担う若者に向けて、『法華経』と『お題目』の素晴らしさや魅力を、如何に分かりやすく伝えることができるか」という問題提起のもと、二日間にわたってグループワークを実施。二十二名の参加者は五つのグループに分かれ、「法華経」と「お題目」の魅力を伝えるためのキャッチコピーを討議し、そこに込めた意図や狙いを含めて分科会の中で発表した。

また、グループワークにあたって、特に「法華経」については、本屋の店頭で見られる書籍を紹介したポップを想

定し、『法華経』を書店で紹介するとしたら、どのようなポップやキャッチフレーズを付けることができるか」というテーマで取り組んだ。

〈初日 九月三日〉

一、問題提起

座長の挨拶の後、問題提起者が、問題提起「第I分科会（現代教化学部門Ⅰ）五十年後のお題目を考える」を読み上げ、第I分科会のテーマと、グループワークの内容を説明した。（以下、問題提起原文）

【問題提起者】…人口減少社会の到来は、旧来の檀家制度による寺院の維持が極めて困難になることを予想させます。既に起きている「葬式離れ、墓離れ、寺離れ」といういわゆる「三離れ」はその前兆に過ぎないのかも知れません。いずれ檀家として寺に帰属するのではなく、自分が好きな宗教（あるいは宗教者）を個人が選び取ることが一般的になるかも知れません（勿論、宗教を持たないという選択肢もあります）。

しかしいかに社会が変わろうとも、五十年後であっても、お題目は五字七字であり、妙法蓮華経の内容が変わることとはありません。そしていかに社会が変化しようとも、私たち日蓮宗の「お題目による即身成仏と浄仏国土顕現」という宗旨は変わることはないはずで。

言うまでもなく、お題目と法華経は私たちの宝です。しかしこれが五十年後も宝であり続けるかどうか、その鍵は私たち教師だけにあるのではなく、お題目の信仰を宝とする信徒がどれだけいるかに懸かっています。今、次の世代を担う若者たちにこの宝の意義を伝えていかなければなりません。

しかしこの「宝」、お題目や法華経を伝える「ことば」を私たちは持っているのでしょうか。将来を担う若者に私たちの「ことば」は届いているのでしょうか。勿論、ことばだけが教化の手段ではありませんが、少なくとも伝道教団を標榜する私たち日蓮宗にとって、この課題は普遍的なものであるはずです。

第一分科会では、この問題を取り上げます。私たちの宝であるお題目と法華経を、どうしたら未信徒の手に取って貰えるのか、その魅力を端的に伝える「ことば」「フレーズ」を考えてみましょう。この共同作業を通し、五十年後、百年後に通じる普遍的なお題目と法華経の魅力を、私たち教師自身が再発見し、共有する機会としたいと考えています。

【作業】

私たち日蓮宗教師にとってお題目とは何なのでしょう。法華経とは何なのでしょう。私たちにとっては宝であっても、市井の人々にとって法華経は難解な漢文で書かれた物語に過ぎませんし、お題目は単なる呪文のように聞こえていることでしょうか。法華経やお題目が「有り難い」という前提を持っていない人々に、私たちは何をどう伝えたいのでしょうか。「お経にこう書かれているから」とか「先師がこう言っている」といったことに説得力はありません。私たちには伝えたいことがあるはず。その思いを未信徒に伝えるにはどんなことばがふさわしいのか、それを探す作業をしてみたいと思います。

①グループワーク（A）

「妙法蓮華経」という本を書店で売るとしましょう。書店の店員や出版社の企画者はどんなキャッチフレーズやポップを付けるでしょうか。法華経を絵本として子供に手に取ってもらうにはどんなフレーズが良いか、若い女性だっ

たら、或いは経営者だったら…。

この「ことば」には、企画者や店員がこの本にどんな魅力を感じているか、何を伝えたいのかが籠められています。そしてこの法華経の魅力を本来伝えなければならぬ人とは、本来私たちであることは言うまでもありません。私たち教師は法華経のどこに魅力を感じ、どう伝えようとするのでしょうか。

②グループワーク（B）

次いで「お題目」にどんなポップやキャッチフレーズを付けることが出来るかを考えて頂きます。例えば小さな子供たちに、例えば今懸命に生活している若者たちに、このお題目をどう伝えましょうか。

「お題目は素晴らしい」これは日蓮宗の教師であれば誰しもがその信念を持つているはずです。そのどこが素晴らしいのか、お題目を唱えるとうなるのか、その信仰を自信を持って勧める「ことば」を考えてみましょう。

以上の作業を通して見つけ出されたその短い「ことば」は、端的にお題目や法華経の魅力を伝えるものです。そしてそれはこれからの布教伝道の力になるはずです。何故なら、長い話はなかなか聞いて貰えませんが、印象的なフレーズなら一言でも心を掴むことが出来ますから（一言で心を掴むようなことばを考えてみる、のです）。

この分科会での作業は、堅苦しく難しく考える必要はありません。一旦難しい教学から離れ、柔軟な遊び心を持って楽しみながらトライして頂きたいと思います。

さて、我が宗でも立正大学や身延山大学で仏教学を専門に学ぶことなく教師となる人が増えていきます。これは宗門の中でも、難しい教学の専門用語は共通言語として機能しなくなりつつある、ということでもあります。しかしこれ

はマイナスとばかりは言えません。難解な専門用語を使わず、平易な「ことば」による伝道を考える良いチャンスともなるはずです。若い教師の柔軟な発想と、経験豊富な教師の工夫が練り上げた「ことば」は短くとも光り輝くものとなるでしょう。宗祖大聖人の「力あらば一文一句なりともかたら（談）せ給べし」との御遺誡は、今後五十年経とも、指針となり、私たちを勇気づけてくれるはずです。その一文一句を探し出してみましょう。

【そして】

考え出したフレーズやポップが果たして五十年後ともかく、現代の若者に通用するかどうか、全体会議終了後の原田曜平氏の記念講演「サトリ世代とは何か―若者の心のつかみ方」を聴きながら、是非ご自分で確かめて下さい。きっとそこに現代の言葉による布教のヒントが隠されているはずです。（以上原文）

【問題提起者】…日蓮宗の宝がお題目、法華経であることはいまでもないことですが、なぜお題目を唱えるのか、法華経のどこが素晴らしいのかということ、皆さんはどう考え、伝えているでしょうか。お題目が五十年後も宝であるか、今の若者たちにこの意義を伝えていくこと。そして、お題目を未信徒の手にも取ってもらいたいのです。

しかし私たちは、日蓮宗の最高の宝、仮にそれを「商品」とした場合、「商品」であるところのお題目と法華経の魅力を伝える言葉を持っているでしょうか。どう売り込めば良いか、その言葉を考えてみたいと思います。

まず初めに『妙法蓮華経』を本屋で売るとした場合、どんなキャッチフレーズをつけるかを考えていただきます。どんな相手に手に取って貰いたいのか、そのあたりも考えてみて下さい。

※大切な宝を「商品」と呼ぶことに抵抗はあるでしょうが、ここはシミュレーションとして柔軟に考えて下さい。

二、グループワーク（A）【二回目】

以上の問題提起の後、座長の指示のもと、四〜五人一組のグループを五つ作り、五十分間のグループワークを実施。大判の付箋と太マジックを用いて「法華経」につけるキャッチフレーズを考えた。

三、発表（法華経のキャッチフレーズ①）

各グループの代表者が発表。付箋をホワイトボードに貼り、キャッチフレーズと、そこに込めた意図を発表した。

グループ①

♪大事な物は目に見えない…振り向けばシャカ!!

【備考】インパクトを重視。手にとってもらえるように。

グループ②

♪天地を揺るがす感動あります。

グループ③

♪救われたのは「私だけじゃない」。

グループ④

人生の処方箋 一粒で全ての病が治る

グループ⑤

子どものための二十八コのたからもの

【備考】子供向け、母親に手に取ってもらえるように。

〈二日目 九月四日〉

一、グループワーク（A）【二回目】

初日に引き続き、再度「法華経」のキャッチフレーズをグループに分かれて検討。

二、発表（法華経のキャッチフレーズ）②

グループ①

人類史上最高傑作!! 眞実は四十年間隠されていた…今!!明かされる釈迦の本音「法華経」 (監督・脚本…お釈迦さま、主演…あなた)

【備考】興味の無い方に。映画のプロモーションをイメージ。

グループ②

「頭で感じるんじゃない 心で感じるんだ」

【備考】二十代の頭でっかちの人に向けて。

グループ③

「生きていて良かった。私はここに生きてます。だから明日も大丈夫！」

【備考】対象は子供達。

グループ④

「いのちのテーマソング 法華経はロックだ」

【備考】対象は三十代の若者。既成概念を破る。

グループ⑤

「十六番目の真実」それは「鏡」

【備考】五十代の会社経営者を対象。

三、グループワーク（B）

続いて、「お題目」につけるキャッチフレーズを各グループで討議した。

四、発表（お題目のキャッチフレーズ）

グループ①

お題目＝respect お題目＝love お題目 is every-thing

【備考】不特定多数、電車の広告をイメージ。

グループ②

心の中の宝物見つけた。

【備考】子供向け。

グループ③

お題目 言う（結う）に言われず 特（解く）に説かれず 摩訶不思議

【備考】お題目が伝わるように川柳風に。

グループ④

お釈迦様の世界へ lets 南無！

【備考】広い世代へ向けて。

グループ⑤

「**現実の世界の姿に気づき 生かされている感謝の心を育て 幸福を実感できるお薬** — 法乳 (For you) 「大人のお薬」—

【備考】お題目を唱えて幸せになるんだよということを伝える。

五、グループワークを終えて

発表を終え、計三回のグループワークを通して感じたことや、気がついたことを参加者に求めた。(・は参加者)

・作業を通じながら、結局感じたことは、「阿仏房さんながら宝塔、宝塔さんながら阿仏房」が一番大事ということ。「人の振る舞いにて候いけるぞ」を今回の教研で感じた。

【座長】お題目がありがたくても、我々自身がありがたい存在じゃないといかんどという話ですよね。

・作業を通して、キャッチフレーズを付ける際、背景となる教学への理解が自分の中で消化しきれていない、こなれていないことを感じた。やわらかい言葉で、相手を考えながらという場合の語彙力の無さを感じた。節度ももちながら、社会の中での考え方を取り入れていくことが大事だと実感した。

【座長】…教学の言葉を、社会に通用する言葉をもっているかということですね。例えば、今回のグループワークを仮に一人でやったらと思うとどうでしょうか？

・年代や性別を分けて考えたときに、例えば対象が五十代の人（子供が自立して孤独な人）と考えると、年代別に分けて考えることが今までなかったので勉強になった。相手の環境や家庭まで考えることが必要だと感じた。

・お寺をとりまく環境の変化もあり、同じようなことを考えた。以前小谷みどりさんの講演を拝聴した際、「お坊さんと社会の間で求めているものにズレがある」と話していた。小谷さんの講演では、一般の人が求めるものは、ありがたいお経と、ありがたい法話とのこと。ライブやコンサートだけではなく、お坊さんにしかできないことが大事だと指摘していた。昨今の社会の流れに引っ張られて、布教方針が右往左往しているのが見える。宗門として一貫性を持つて欲しい。あるお上人が「自分たちはやっているんだという意識がある」と仰っていた。欠けているのは「お檀家さんに対する真心でしょう」とのこと。

【座長】…今回の作業はお坊さんとしての観点からアプローチした。一般の人に伝わるのかという点が問題。土台となる、お経やお説教ができてないと、そこがスタートですよということでしょうか。

・グループワークの場を持ちえないということが問題とを感じる。

【助言者】…みなさんイキイキしてました。歓喜踊躍。久々に脳みそ使ったんじゃないですか？「唱えよう、口に心に、共に身に！」（助言者作のキャッチフレーズ）

〈五十のオピニオンへ提出〉

以上のグループワークの結果、「法華経」は十個、「お題目」は助言者による「唱えよう、口に心に、共に身に！」を含めた六個のキャッチフレーズが練られ、これらを中央教化研究会二日目の全体会議においてまとめられる「五十のオピニオン」へ提出した。

〈まとめ〉

二日間にわたり、「法華経」と「お題目」について、その内容や魅力、素晴らしさを伝えるためのキャッチフレーズやポップを討議・考案した。

最初に、「法華経を本屋で紹介するとしたらどのようなポップを付けるか」という状況を想定したことで、二日間を通して、必然的に短い文言で分かりやすい言葉、印象に残る言葉を考えることが求められた。結果として、専門用語を咀嚼し、若者や未信徒に向けて「分かりやすく短いフレーズで伝える」という問題意識は、分科会全体で共有することができたと思われる。

また、参加者の所感にもある通り、年代の異なる参加者同士でグループワークを実施したことにより、伝えるべき相手の年代や環境、価値観に合わせた「ことば」やアプローチが必要であるということ、そのためには、世代の異なる教師同士でグループワークの場を持つことの重要性が再確認された。

〈おわりに〉

「キャッチフレーズやポップを考える」というように、形の上では堅苦しさからは取れて距離を置いた分科会であったが、その実、真面目に取り組み取り組むほど、教学の理解や体験が必要となり、教師一人一人が「法華経やお

題目は、「何故ありがたくて素晴らしいのか」という、日蓮宗教師としての根本的なあり方について、あらためて真正面から考える分科会となったのではないだろうか。

携帯電話やスマートフォンを使い、メールや Line・Twitter・Facebook 等の SNS を介する短文でのやり取りが日常化しつつある昨今、こうした傾向が五十年後の日本の全世代に及ぶのは想像に難くない。この様な現状をふまえると、今回の第 I 分科会（現代教化学部門 I）の五十年後のお題目を考える。は、短文を用いた布教活動の試みとしての第一歩といえるのではなからうか。

第Ⅱ分科会〈現代教化学部門Ⅱ〉

成長主義を問い直す――五十年後のエネルギーと宗教者――

座長 藤崎善隆

問題提起 梅森寛誠

助言者 石川浩徳

記 録 蓮見高円

一 運 営 川口智徳・灘上智生

一、問題提起

去る四月十一日、政府は「エネルギー基本計画」を閣議決定した。それは、原発を「重要なベースロード電源」と位置付け、「原発ゼロ」を目指した政策からの転換を明確に示すものであった。原発輸出をはかり、原発の再稼働へと向かう安倍政権の原発重視の姿勢が一層顕著になった。

一方で司法(福井地裁)は五月二十一日、「電気を生み出す経済活動の自由は、生命や生活を維持する人格権よりも劣位に置かれるべき」とし、大飯原発三、四号機の再稼働差し止め判決を申し渡した。また、フクシマの現状を踏まえ「豊かな国土とそこに国民が根を下ろして生活していることが国富とも述べた。

さて、中央教化研究会議(特に本分科会)に於いては、過去三年間、原発問題に関する議論を続けてきた。それは、

私たちの掲げる「いのちに合掌」そして「安穏な社会づくり」のあり方を問うものであったはずだ。今、『アベノミクス』と称される現政権の経済政策は、成長戦略を掲げ原発推進をもつて突き進もうとしているが、それらは私たちの求めるものとの関係に於いて、いかなる整合性を持ち得るだろうか。

そもそも原発は、高度成長時代を象徴する存在であった。五十年前の昭和三十九年（一九六四）、現宗研が創立された年に、東京五輪が開催され、新幹線が開業したが、その二年後には国内初の東海原発の営業運転が開始されたのであった。昭和四十五年（一九七〇）の大阪万博には、同年運転開始された、敦賀・美浜の原発から電力が供給され、『原子の火』が称揚された。そこでは「人類の進歩と調和」が謳われ、成長のシンボルとして、そのピークを演出することになった。その二年後にはローマクラブによって「成長の限界」が示され、翌年には第一次オイルショックを迎えることになる。

しかし、それをも奇貨とするかのように、「石油依存からの脱却」が叫ばれるようになり、原発の建設はむしろ進展した。そして、バブル経済からその崩壊を経て、時代はやがて低成長・縮小社会に向かつていく。

かように、過去半世紀を通観すれば高度成長時代を彩る事物に遭遇し、その光と影を認めることにもなるが、私たちはそれらをしっかりと総括してきただろうか。その間、私たちが得たもの・失ったものは何であろうか。それらの議論を踏まえ、成長主義への問いを発しつつ、エネルギー需給のあり方も真摯に考えていく必要がある。

かかる意味合いに於いて、福島原発事故は文明の転換点になり得たはず、ではあった。

人口減少時代に突入する今、現政権の指向するものは、再びの東京五輪とリニア中央新幹線開業。「国土強靱化」の美名のもと、新たな土建国家に向かおうとするのだろうか。

こうした動向にも一瞥しつつ、私たちは宗教者としてなすべきこと、寺院や僧侶の役割も模索しつつ、次なる五十年の展望を聞いていきたい。

千葉大学法経学部教授・広井良典氏は著書『人口減少社会という希望』の中で次のように述べている。「私たちが高度成長期の発想や価値観の枠組みの中で、あるいはその延長線上で物事を考える限り、人口減少社会は敗北あるいは「衰退」に向けた進行としか考えられないだろう。しかし、新たな視座で状況を見ると、それはむしろ全く逆に、日本社会が真の豊かさを実現していくことに向けての大いなる道標として立ち現れるのである。」

問題提起者による補足説明

まず、私がなぜここにいるかの説明をしようと思います。私は、現宗研に所属して、五十年の歴史の後半部分に関与してきました。特に過去三年間に原発問題を扱ってきました。言うまでもなく、三年半前に福島原発事故があり、中央教研にて原発問題をあつかってきました。しかし、汚染水の問題や、半減期の長い放射性物質の問題のように、いまだ解決していないどころか、五十年先の未来にまで及ぶ問題です。エネルギー問題はすべてそうです。顔も見えない子孫にまで及ぶ問題です。

殊にこの分科会では、環境問題、温暖化や環境ホルモンなどが問題になった時期に、環境問題を扱ってきました。それらの問題も深刻化しつつ継続しています。今回のエネルギーの問題も同じです。広島の被害も、温暖化によるもので、関係があります。異常気象が最近多くなったという印象があります。洪水、干ばつなども目立ちます。三原所長の挨拶の中にあつた安国論の中の世界観にもかかわるかと思えます。

さて、中身の方に入ります。現政権はアベノミクスという「成長戦略」を高々と掲げて、原発の再稼働や輸出を明示しております。今の政府は、人口が減少するなかで、いまだに成長戦略を掲げているのです。一方で司法では、「電気を生み出す経済活動の自由は、生命や生活を維持する人格権より劣位に置かれるべき」と判断しました。昨年私が作成に関与し、残念ながら廃案になった原発宣言文の内容と一致する部分もあり、司法に先に言われてしまった

という感があります。民衆は脱原発という意見が多いと思いますが、現政権の成長戦略に希望を持っている方も多いと思います。

今回、五十年後を考えるには、まず五十年後をしっかりとらえる必要があると考えました。参加者の顔ぶれをみると、五十年前に生まれていた方も、生まれていなかった方もいますが、自分自身の自分史的な意味でも振り返ってみますと、五十年前の東京オリンピックの時には十代でした。多感な時期に高度経済成長時代を過ごしました。原発の商業稼働、大阪万博などがあり、「人類の進歩と調和」を謳歌する時代でした。今から考えると、高度成長⇨原発推進とされてきました。エネルギーをたくさん消費することが幸せにつながり、経済成長することが善とされてきました。後知恵で批判するわけではありませんが、しっかりととらえる必要があると思います。

その一方で、「成長の限界」という発表がありました。また、オイルショックがあり、以降、原発推進に前のめりになっていきました。二〇一一の福島がありました。

未来には東京オリンピックが開催されます。「五十年前の夢よ再び」というのでしょうか？

エネルギー問題というのが、二つあります。

一つには、化石燃料などがあと何年もつだろうかという問題。ただ、これは技術革新によって寿命が延びてきています。

二つには、エネルギーを使いすぎているという問題です。我々がかつての時代に比べて、とんでもない大きさでエネルギーを使っています。江戸時代の百倍は使っています。みんながもつと豊かになろうという考えは大間違えです。経済が成長したのは、近年の百年に過ぎません。その中でエネルギーが大量に消費されるようになったのです。

使った後の廃棄物や、排熱の問題もあります。とくに排熱は大量のもので、原発は発電時に二酸化炭素は出しませんが、原発から出る温排水による海水温の上昇問題があります。原発のエネルギーの三分の二は排熱されています。

エネルギー消費の歴史をみると、急激に上昇しています。化石燃料時代など、近年の一瞬に過ぎません。また、世界の中では、エネルギー消費に国別の差があります。エネルギーを使うことが先進国であるという風潮があるのです。エネルギーを消費すると、寿命が延びるというデータがあります。しかし、エネルギー消費が四キロカロリーまでは寿命が延びるが、一定割合以上は大して寿命が延びるわけではありません。一部の先進国が過剰にエネルギーを消費する不公平な社会はいいのでしょうか。

京都議定書などでは、第三世界が、もっとエネルギーを消費する権利を求めて紛糾しました。

ここまで、今日は過去の五十年のエネルギー消費の話を概観しました。発電とは、非常に効率の悪いものです。そんなもので、電力化を推進するのは、問題ではないでしょうか。明日は、そのような話もしたいと思います。

二、分科会議検討

一日目

座長

一日目は、問題提起者の梅森上人のお話を受けて、「これまでの五十年の成長主義社会において」をテーマにマトリックスを作っていました。

まず、ポストイットに、過去五十年間にあった変化を書いています。模造紙に、縦軸「良い↑悪い↓」と、横軸「現れた↑消えた↓」が描かれていますので、書いていただいたポストイットを、ご自分が当てはまるところに部分に張っていただき。マトリックスを作成します。

問題提起で話されたように、原発の問題を一つの象徴として、成長主義の名のもとに、犠牲に目をつぶって、成長という価値観を優先してきたのが過去五十年でした。これを踏まえて、過去の五十年にあったもの、エネルギーを中

心に、エネルギー問題にこだわらなくてもかまわないので、現れてきたもの、消えてきたものを書いていただきたいと思います。

参加者各自、作業の後、座長がポストイットをいくつかピックアップして議論を行った。

・インターネット（現れた、良いもの）

調べ物を効率よくできるので良いと思う。

・インターネット（現れた、悪いもの）

情報ばかり得ることで、個々で調べるという能力が失われているかもしれない。真偽を調べることもしなくなってきた。

座長

何事も、良い面と悪い面があるという例で、ピックアップしました。悪い面があったら、良くなるように修正することが大切だと思います。

・自然（消えた、良いもの）

・エコロジー（現れた、良いもの）

残念なことに、自然は消えてしまったが、その一方でエコロジー（節電意識など）が現れてきたことは良いと思う。

・新宗教（現れた、ちょっと悪い）

多様な価値観の中で、仏教を含む既存宗教の中で、生まれてきたものなので、反省の意味を込めて、少し悪いという部分に張りました。

・東京五輪（現れた、良い）

そもそも、成長主義を問い直すというテーマの付け方が理解できない。本当に成長主義になったのはごく一時期だと思う。ただ、過去五十年と言うことであれば、あの東京五輪は国際社会の中で、敗戦の中から戻ったという意味で、エポックメイキング的に、非常に良かったことだと思う。

日本人は目標を置かないと動かない。「ゆとりある社会」とした途端、子供の学力が低下した。オリンピックは目標として良いと思う。

六十年前に友人が「日本人にとって、世界は二つしかない。戦前はドイツと日本、戦後はアメリカと日本」と言っていた。日本人は、「海外」とまとめてしまいがちだが、オリンピックでは、個々の国を注目できる。日本の遅れた国際感覚にいい影響を与えらると思う。国を挙げてそういうことに関与できるのは、非常に良いことだと思う。ジェットコースターみたいな高速道路を作ったというような問題も多かったが、当時はそんなに自動車が増えるとは想像できなかった。新幹線にしても、普通の特急に比べて数倍の電力を消費する。しかし、日本中をつなげるという意味は大きい。頭から「とんでもないことを作った」というのではなく、もう少し、地方の方の立場などを理解したうえで議論する必要がある。

参加者

インターネットなども、性犯罪の温床になるなど問題が多い。一方で、非常に便利なものであり、なくすことは難しい。自動車も何万人も殺しているが、なくすことは不可能。この様に、物事には両面がある。単純な一軸ではとらえきれない。折角の五十周年がこの程度の議論になるのでは、議論が単純すぎる。明日はもっと考えてほしい。

座長

先ほども言いましたように、何事も物事には両面があつて、視点によって良い悪いが変わるのは理解しています。ただし、毎年中央教研では、ご意見があまり出ないという事が問題になっています。その対策として、まずは、話のきっかけになればと思つてこのような手法を取り入れてみました。単純すぎるというご意見はもつともですが、是非このマトリックスを議論のきっかけとして、議論を深めて頂ければと思います。

参加者

マトリックスをきっかけとして議論をするのはいいのですが、テーマに「〜と宗教者」と書いてあるので、宗教者としての自己反省が土台になればならないと思います。ですから、無くなる事はしょうがないとして、「なぜなくなったのか」という分析をする必要があります、その上で、それが必要であるならば、宗教者がすべきだったことを話すべきだと思います。

先程、成長主義のお話が出ましたが、「豊かさ」という概念があります。例えば、昔は薪で五右衛門風呂に入っていました。今から見ればそれは「豊かですな」といふ人もいますが、当事者にしてみれば辛いんです。それが辛いから、ボタンを押せばお風呂に入れることを豊かさとして求めたわけです。それを否定されると、どうなんだろうと思

います。先人たちが豊かさを求めて前向きに生きてきたんだと言う事は、前提としないと行けないのではないかと思います。エネルギーを消費することで、豊かさを求めてきたということは否定できないと思います。

座長

それに関しては明日議論をしていただき、オピニオンに纏めて頂きたいと思っています。

参加者

ぶっちゃけると、我々宗教者は追い詰められていると私は思っている。それなのに、上っ面をなでたような上品な議論で終わらせちゃうのはもったいない。我々と関係のない話題で終わるのではなく、もうちょっと生々しい議論になってもいいと思う。

座長

是非そのようなお話をしていただきたいと思っています。

お寺には、経営と布教という二つの面があり、檀家制度は経済基盤にかかわる大きな問題です。お寺の経営が成り立たなければ、布教の場所がなくなりかねません。議論の取っ掛かりとして、その辺の話を聞きたいと思って家・檀家制度をピックアップしたいと思います。

・家、家族関係(消えた、良い・悪い)

三十数年前の学生の時代から「家長制度はなくなってくよ」と言われてきました。それは、「日本が豊かになっ

てきた」という意味でもなると思います。技術が進歩し、エネルギーを大量消費するようになった結果、実家に住まなくても、一人で生活できるようになったわけです。それが良いか悪いかは置いておいて、その根源は人間の欲にあると思います。

全部の根源は欲にあるという意見がありました。豊かさを求めることまで欲と言って切り捨てるのは問題だと思います。

助言者

インターネットの問題などがあつたが、便利なものは便利。それがもとでいろいろな悪いことが起こっていることは考えなければいけない。きれいごとばかりという意見もあつたが、櫻井先生の講義にあつた宗教者ができることの中で、至近の問題としては、後継ぎがいなくなつて経営が成り立たない、後継者がいなくて寺自体がなくなりかねないと言ふ問題が確かにある。ただ今日は、問題提起の梅森さんの提案した、成長主義を問い直すこと自体に集中的に議論をした方がいいと思う。あんまり広い問題だと、どこに視点を置いていいか分からなくなつてしまふ。これからの五十年というものを考えるとき、宗教者という我々の立場で、エネルギー問題をどうすべきかという議論をした方がいいと思う。

座長

一 昨年、昨年と引き継いで原発を中心テーマとして中央教研を開催しました。

本年は、第Ⅱ分科会でそれを引き継いだわけです。ただ、エネルギーだけだと偏ると思ひ、とりあえず何でもと言ふ事でマトリックスを作つていただいた訳ですが、残念ながらエネルギーに関しては、あまり出てきませんでした。

さて、本日は、五十年の総括をしたわけですが、明日は、五十年未来の話を、オピニオンを作りたいと思います。本日が分かったように、現れて悪かったもの、消えてしまった良かったものなどが沢山ありました。現れた或いは現れそうな悪かったものは消えるように、消えた或いは消えてしまいそうな良いものは消えないようにするために、どうすればいいかという、「五十年後の未来へのオピニオン」を考えて頂きます。

二日目

座長

本日は、未来の五十年のエネルギー問題について論じたいと思います。

「このまま我々が手をこまねいていたらこうなるだろう」という予想をしてください。それを踏まえて、そうならないために宗教者がとるべき行動を、オピニオンとしてまとめてもらいたいと思います。

例えば、「我慢」というものがなくなる良いものと考えます。我慢がなくなれば、欲望のまま突っ走り、争いが起きかねません。仏教者としては、我慢が残って、安穏な社会づくりに貢献できるように行動していかなければならないと提案したいとおもいます。

では、問題提起者から、二日目の追加の問題提起をしていただきます。

問題提起

これからの五十年を中心に申し上げたいと思います。

昨日、安倍改造内閣が発足しました。また、経産省が小淵裕子さんになりました。女性という事でなされた人事だと思えます。新聞では、「アベノミクスはまだまだ道半ば、日本経済を強くする好循環をしつかり作り、責任ある工

エネルギー政策の実行に向けて取り組んでいく」という声明があり、原発推進の宣言と思われれます。経産省の方針は、原発推進を描いているのだと思われれます。

極論ですが、安倍内閣の方向性と真逆なものを目指すが、我々宗教者の目指すべき方向なのではないでしょうか。

我が国の二〇三〇年までのエネルギー予測の資料をお配りしましたが、そのまとめを見ると、これからエネルギーの需要の伸びは止まるであろうということが予測されています。

その一方で、電力化が進展することが予測されています。電力化はロスが多く、エネルギーの大半は排熱となってしまう。最近では、なんでも電力で動かしていますが、これは、たくさん電気を使うように煽られているからです。昔なら電気でなくても動くものまで電化しています。これは、経産省が原発を使わせるためにやっている事です。

一日の電力需要のピークに対して、原発は対応できません。原発は常に一定出力で動かさなければならぬからです。政府は原発を重要なベースロード電源と言っていますが、システムの動かし続けなければいけないだけです。また、かなりの設備投資をしているために、投資を回収するために再稼働をしたいので、ベースロードと位置付けて、動かしたいのだと考えられます。これはますます、省エネを阻害するものです。

このように、電力化を進めることで原発を動かしたいのが経産省であり、政府の目的であると思えます。

政府が枕詞のように「資源に乏しい我が国は」と言うのは、資源が乏しいから原発を導入しなければいけないと言っているのです。

エネルギー消費の未来予想の図を見ると、政府の想定は、省エネをせずに現状固定で消費をし続けた時の予想をしており、政府としては省エネをしてほしくないと考えているのが読み取れました。

我々はもともと積極的に省エネを心がけなければならない。省エネと言うと、座長さんが言ったような「我

「慢」を思い浮かべる人もいますが、いやいやな受け身でやるのではなく、積極的に皆とかかわって楽しく、省エネを目指さなければならぬと思います。省エネが常識になって、言葉自体がなくなるといってほしいし、お寺や僧侶がそれを率先する立場になってほしいと思います。

エネルギーの話はもともととしたいのですが、いったん別の話にして、五十年後のオピニオンにリンクするような提案をしたいと思います。

私は、レジユメの展望の中に、「高齢者や弱者の目線でまた連携して（たとえば交通移動の権利の尊重と確立）など」と書きました。交通の課題はエネルギーと切っても切り離せない問題です。過去五十年には新幹線が生まれ、未来にはリアモーターカーが創られます。

ここで、公共の交通手段の話をしたと思います。私は宮城の仙台の住職ですが、仙台市は、人口百万人前後で、これから減少することが予測されています。震災の影響で一時的に市内に集まっている現象もありますが、長期的には減少します。その中で、地下鉄の建設が計画されました。南北線が既存路線として開通しており、現在東西線が計画・建設中です。実は、自坊の目の前にも駅が作られる予定です。これまでの成長主義的な価値観では、うらやましがられる事だと思えます。しかし、個人的にはそれは違うのではないかと思えます。地下鉄という交通手段は、東京などのメガ都市であれば機能するでしょうし、エネルギー面でもよいことだと思います。しかし、百万を切るような都市では、財政面で無理があります。更には、これまでであった市バスの再編成がおこなわれ、寺の前を通っていたバスが全面廃線されることになりました。私は仙台市に反対の意見書を出しました。これから高齢化が顕著になる中、地上を歩いて利用できる市バスや路面電車、モノレールの方が、交通移動をする権利を守るうえで優れています。それらの選択もあつたはずなのに、それらを選ばずに地下鉄を選んだのは、高度経済成長という価値観があつたからではないでしょうか。市の説明会の中では、バス廃線の中で、地下鉄をバリアフリーにしたので、高齢者や障害

者も利用できませんという説明がありました。実際には直線距離で八〇〇メートル、実際には一〜二キロを歩くことになりません。交通行政はそれを考慮してくれません。我々はそうではない方向を打ち出していくべきだと思います。自坊では、建設開始の前に、お寺で反対の講演会などを行ないました。これからの未来の人々のことを考えて行動しなければならぬと思います。現在、地下鉄賛成だった人たちも、市バスが廃止される段階になって、反対になってきました。このように、多数意見や時代の空気に流されず、おかしいと思ったことは少数派でもいいから情報を発信することがお寺の役割ではないかと思えます。

昨日の櫻井教授の講演では、これから人口減少社会に当たって、地域コミュニティをもっと積極的に求めべきだと言っていました。また、広井良典氏の「人口減少社会という希望」という著書の中で、人口減少ということとは、地域社会のコミュニティという観点では、いいものだと言われていました。これこそ、僧侶が関与できる部分ではないでしょうか。

また、これから、発展の時代から定常化の時代に入っていくと予想されます。櫻井先生は幸福ということを考察されていたが、幸福の質なども我々は考えていかなければならないと思います。

時間になりましたので、以上としますが、人口減少社会の中で、我々が目指すべき方向を考える上での、ヒントになれば幸いです。

座長

昨日の櫻井先生のお話、梅森上人のお話にもありましたように、人口減少は間違いなく起こり、エネルギー需要が減少するのは間違いない事です。それなのに、今までの価値観のままでもいいのでしょうか。

私たちが未来を展望した時に、我々が行動しなければ、どうなってしまうのでしょうか。我々が行動しなくても、

いいものが生まれ、悪いものが消えるかもしれません。しかし、我々が行動しなければまずい事が起きるという事態を想定して頂き、昨日と同様にマトリックスを作っていたいただきたいと思えます。その上で、我々が宗教者として、それをどうすればいいのかを検討してほしいと思えます。

・無駄なこと、豊かさ(消える、良い)

いろいろなことを合理化することはいいいことだと思います。一方で、私たちお坊さんは、合理化された社会と、別の価値観のサイドにいるべきだと思います。昨日の桜井先生の話もそうだったと思います。例えば、お檀家さんから、「お塔婆をマジックで書くお寺があるんだけど、それは普通の事なんですか？」と聞かれ、「それはちよっと珍しいですね」と答えました。「マジックが何が悪いんだ」という考え方もありますし、位牌も印刷で紙をはつてもあるものもあります。これらは合理的といえれば合理的ですが、私たちはそういうものに流されず、無駄であっても、墨をすって筆で書くのが、豊かさであり、大切なだと主張し続けたいと思います。多数派にはならないでしょうが、少数派として、しっかりと残していかなければならないと思います。

参加者

問題提起の梅森上人に、五十年後のエネルギーをどうすればいいのかという考えがあるなら聞きたいと思えます。

問題提起

今、ポストイットに「目指そう素晴らしき江戸時代」と書くようしていました。反原発の運動をしていると、「江戸時代に帰るのか」と揶揄されます。しかし、放射能でビクビクするよりは、「江戸時代の方がよっぽどいい」と思

います。江戸時代の時代思想は、マイナス面もあります。例えば御上の権力が強く、窮屈な時代でした。しかし、あの時代に、世界に先駆けたエコロジーな都市でした。現代においても、あれほどの都市はついで実現されていません。言葉を変えれば、江戸時代こそ我々のお手本とすべきものではないでしょうか。その中には、地域のコミュニティー、支えあいなどもあったのではないのでしょうか。極論ですが、積極的な省エネという意味合いで、「目指そう素晴らしき江戸時代」をオピニオンとして考えていました。

参加者

と言う事は、電力は使わないと言う事ですか？

問題提起

いや、使います。使うけどれども、今みたいに電熱器やヒーターまで電気を使うのナンセンスです。発電するのに三分の二を熱としてロスし、生まれた電気を送電して熱を生み出すために使うならば、最初から化石燃料を直接燃やした方が効率がいいわけです。化石燃料を大事に計画的に使いながら、その中で効率のいいシステムを作っていく、楽しく省エネを目指したいと思います。

参加者

鉄道などはどうなるのでしょうか？ 蒸気機関車になるんですか？

問題提起

突き詰めればそうなりますね。ただ少なくとも今までの延長線上で、新幹線やリニアなど、桁違いに電力を消費するようなものは、賢明な選択ではないと思います。

運営

梅森上人は、五十年後ほどのような社会になると思われますか？ 今の社会は、欲を優先させ、省エネよりも、早く便利にとりいう事を求めてリニアモーターカーを作ろうとしています。

問題提起

少なくとも、経産省が描くような社会にはならないと思います。我々の生活にも関わってきます。例えば、この中央教研のように、飛行機や新幹線を使って全国から集まると言うことが、同じようには出来なくなる、あるいはやる必要が無くなるのではないのでしょうか。もっと教区内、管区内で話し合い、中央で話す必要がある時には、何らかの方法で持ち寄って、情報交換をするイメージです。

いずれにせよ、極論は良くないので、徐々にそういった方向を目指そうではないかという提示であって、劇的に江戸時代を目指すものではありません。五十年後なのでどうなるかはわかりませんが、方向としてどっちを目指すべきかという話をすればいいのではないのでしょうか。

参加者

世の中全体を変えるのは徐々にと言うのは間違いないと思います。しかし、僧侶としては、自分ができる範囲では

やっていくべきではないかと思えます。まず自分がやって、それを他人に共感してもらわなければならないと思います。

ただ、いざ実行に移そうと思うと難しい。例えば、今年の夏、自分の部屋ではエアコンをつけませんでした。しかし、檀信徒が入る部屋にはエアコンをつけました。自分がやるのはいいんですが、檀信徒にまでそれを強要するのは難しく、行えませんでした。

問題提起

仙台は涼しいのでエアコンは必要ありません。しかし、これを暑い地域の方に強要しようとは思いません。むしろお年寄りには、無理しないように言っています。矛盾するようですが、そこは臨機応変に対応を変えるのが大事だと思います。

助言者

総本山の身延山にはエアコンが全くありません。バリアフリーもありません。だから、うちにもありません。むしろ、バリアありーで、手を差し伸べてあげるのが大事で、その方が体力もつくと思います。

座長

自分が出来る事、やって行こうとする事、それを信念を持って、広い視野、仏教的価値観でやっていくことが大切だと思えます。

さて、事前に配布した資料のなかで、「私たちが高度成長期の発想や価値観の枠組みの中で、あるいはその延長線上で物事を考える限り、人口減少社会は、敗北あるいは衰退に向けた進行としか考えられないだろう。しかし、新た

な視座で状況を見ると、それはむしろ全く逆に日本社会が真の豊かさを実現していくことに向けての大きい道標として立ち現れるのである」と書かれています。つまり、これまでの価値観のまま我々がいけば、人口減少は敗北です。それをどう転換していくか、そのきっかけとして我々がどう行動できるかということが求められてきます。それがこの分科会のテーマでもあります。

どうなるか予想もつかない五十年後のことです。ある意味無責任になりますが、価値観を転換することでなんとかできないかと、大胆な発想をポストイットに書いてもらいたいと思います。

・体が熱くなるようなわくわくするよろこび（無くなる、良い）

現代はネットで簡単に情報が入ってしまい、努力しないで情報が得られてしまいます。過程が大切なのではないのでしょうか。今は結果ばかりが重視されていますが、甲子園野球のように、過程の努力を大切にすることを伝えていきたいと思っています。

結果ではなく、プロセスを大切にし、やってみなければわからないという喜びを人々に示すことが我々の課題であり、合理化などの中で消えてしまう価値観を宗教者として、宗義から導きたいと思っています。

・原発事故や、核廃棄物の問題（現れる、悪い）

お互いに廃棄物を押し付け合って処理できない問題が現れてくると思います。宗教者としてはそういう所に声を上げていくべきだと思います。ただ、個人でやっても社会的には目立たないので、地元であれば仲間などの人数を固めて、表明しなければならぬと思います。その為に、仲間を作っていくことがまずは大事だと思います。メールなどではなく、対面で食事などをとりながら、人とつながっていくことが大切だと思います。

助言者

豊かさ、便利さなどは、江戸時代では戻りすぎ。昭和初期三十年代がいいのではないか。お風呂はマキ、竈でご飯をたいておにぎりを作った。スポーツなども、そのころは、結構わくわくしていた。原発もなかったから、放射能の心配もなかった。団扇で暑さをしのいでいた。ダイヤル式の電話はあって、通話は十分機能していた。このぐらいのレベルに戻せば、エネルギー問題や、日常生活などもいい方向にもどるのではないだろうか。

石橋湛山先生は「小日本国」という考えを言っておられていたが、今こそそういう考え方が大切なのでは。あまりに便利になりすぎると、帰って害悪が生じる。石橋総理の後の岸総理が安保などをやって、どんどん悪くなった気がしてならない。

・役割（消える、良い）

便利になっていく中で、昔と比べると、人がやっていたことを機械がやっています。同様に、家族の中でも、役割が多かったと思います。それに比例してエネルギーも使うようになってきました。将来的にも、家の中で一人が行う役割が減っていくんじゃないかと思います。機械にたよるのではなく、自分から進んで家族の中の役割を果たすことを提案します。便利な機械に頼りすぎないことが大事だと思います。

座長

コミュニティーの中の役割も、これと同じではないでしょうか。

・気遣いと助け合い（消える、良い）

先日温泉旅行に行ったら、中居さんに対してお客さんが「ありがとう」と言ったり、手伝いをしたりしていた。こういう気遣いは日本人の大切な風習だと思う。ホテルなどでは、サービスを受けるときの関係になってしまう。私はあえて「ありがとう」などと大げさに言うようにしている。このように、助けあい、気遣いなどを残すことが大切だと思う。

参加者

成長戦略に思うことなんですが、私の住んでいるところは、駅の終点です。もっと伸ばす計画があったんですが、途中で干潟があり、カニがいる自然を守るために、電車が伸びませんでした。私としては、線路が伸びてほしかった。伸びていたら、地元の経済が活性化し、過疎にもならなかったかもしれません。

カニを守ることも大事ですが、そのために現在は過疎化し、老人が孤独死する危惧もあります。コミュニティーをしっかりとって、そういう人たちをケアしてこうとは思いますが、自然を守ろうと言うのも人のエゴなのだと思います。

また現在、森の中にマンションを建てる計画があり、それに反対する人がいます。しかし、その反対している人たちは、過去に隣の森をつぶして建てた住宅に住んでいる人たちなのです。「森を潰したアンタたちが何を言っているんだ」と言いたくなります。

生活していく中で、自然を残していくと、生活ができなくなることもあります。死ぬ人もいるかもしれませんが。便利な所に住んでいるよその人は、自然を守れと言います。その結果、道路が出来なくて、不便な生活を強いられた地元の方は、救急車が間に合わなくて死ぬかもしれません。そういうことも考えてほしいと思います。

成長戦略を悪いものだと決めつけてしまうと、成長できなかった町が取り残されてしまいます。我々はそういう残された人たちのことも考え、助け合わなければならぬと思います。

座長

昨日も言いましたように、立場によって、意見が違ふのは当然です。その中で、全体として、良い方向に行くように議論を進めて欲しいとおもいます。

さて、残り一時間となりましたので、そろそろオピニオンをまとめていきたいと思えます。

参加者

先程も、エネルギーの浪費を避けることは大事という意見がありました。もちろん、江戸時代に戻るのとは不可能だと思ふし、それは承知の上で言ったのだと思えます。一方、その対極に寺の生き残り問題があり、自分の寺でエネルギーのロスを減らすことを検討されてきました。昨日の基調講演以降、日本の人口がどんどん減っていくことを前提に議論しろと言うことだと受け止めています。人口が減っていくという事には確かにプラスの面があります。江戸時代の人口は四千万人ぐらいだったそうですが、日本が江戸時代の寺受け制度に戻れば、お寺は楽です。もちろん、江戸時代に戻ると言うのは、そういう意味ではないし、そういうことは有り得ないと思えます。また、人口がなくなる地域が沢山あるという国の報告がありました。そうすれば、新幹線もいらなくなります。新幹線は、政治家たちが票のためにそれぞれの地元で延長していききました。それが日本の社会です。そこに我々のお寺もあるんです。私は神奈川ですが、都会に住む人間は、自然が沢山あるといいねと言います。しかし、自然はあっても他には何も無いという地方の人々が、この百年、どれだけつらい時代を送ってきたか。その人たちに新幹線はいらぬとはとても言えま

せん。お寺はそういうところでも生きてきました。放っておいても人は死ぬんだからとは言えない。

また、日本が国際社会の中で生きていくことがありまして、これがめっちゃくちゃひどい。私も、湛山先生時代の国際社会は、中国などは認知されていませんでした。国連でも台湾が中国であり、大陸は中国ではありませんでした。しかし、今の中国は「我が国は大国である。太平洋は中国とアメリカで分割する」ことを提案している。こういう状況もあると言う事を、坊さんも知ってなければならぬと思います。その中で、日本は軍隊をつくるのか？ それはとんでもない事です。

日本の新聞は、何度も変節してきました。自衛隊、日米安保は憲法違反だとずっと言ってきました。それが、社会党の委員長を頭に持ってきた政権から、ガラツと変わりました。それに対して、朝日新聞は何も総括してません。最近、従軍慰安婦がインチキナ人が書いた記事だと認めました。それに対して、池上さんが「朝日は謝るべきだと」書くようとして朝日から拒否された問題で、朝日新聞の記者が沢山怒ったわけです。

この様に、世の中はそう簡単ではありません。しかも我々お坊さんは国際的な情勢に疎いです。

中国は情報統制がされていますが、私は個人的に中国の友達がいいます。中国は、日本の十倍の人口があり、中国の一人が日本の十分の一しか生産しなくてもGDPは日本を超えます。数年前、中国が日本のGDPを超えて世界二位になった途端に、ものすごく中国の鼻息が荒くなりました。この二十一年間で中国の防衛費は増えています。その隣に日本があります。太平洋を支配するためには、日本は邪魔です。ところが、経済的には、日本は中国に依存しています。アメリカにとつても最大の貿易相手は日本ではなく中国です。そういう中で、この五十年を考えなければいけないという事を認識しなければならぬとおもいます。

日本は、省エネを推進して、世界一エネルギー効率がいい国です。そうやって電力の消費を減らしましたが、使う種類も増えたので全体としては減っていません。それを、どこのレベルにするのか、昭和三十年代にするのか？ そ

れを議論していく必要があります。

また、世の中と全く乖離してはやっていけないのがお寺です。だから、檀信徒の意見は、無視できません。例えば、私の檀家だったら、「行燈で暮らせ」と言えば私はクビを切られます。昭和三十年と言っても、そのころを知っている人が居ません。例えば、交換手が繋ぐ電話は、電話番号を覚えなくてもつないでくれるので便利でした。それが電話番号を使うようになって、いちいち番号を覚えなければならなくなって、不便になりました。世の中は、とんでもない所から問題が起こってきます。

もう一つ、とても大事な問題で、原発の廃棄物の問題が出ましたが、仮に原発を即時廃棄したとしても、廃棄物の処理は数十年はかかります。その間、優秀な技術者、研究者を確保しなければなりません。そういう問題があると言ふ事も、我々は知ってなければならぬ。だから、廃止はすぐ難しいという事を認識しなければならぬ。原発を廃止しても原発からは逃げることはできません。五十年後でもまだやっているといます。

ただ、原発にも良い面もあります。先の震災で、事故になったのは、東電のあのひとつだけで、すぐそばの女川原発などでは、原発が地域の避難センターになって、住民の方が数週間居たと言ふ事も事実です。

新幹線の話題も出ましたが、あの地震の時、二十四本の新幹線が走っていましたが、一両も脱線しませんでした。物を判断するときは、色々な側面で考えなければならぬと思います。その上で、こうしたらいいと言ふお話になればいいと思います。

座長

それでは、オピニオンをつくっていきたいと思います。

まず、昔に戻ろうという意見がありました。エネルギーを無駄にせず効率よく使うために、我々が率先して行わけ

ればならないことだと思えます。どのぐらいの時代に戻すのがいいでしょうか。坊さんとして、どういう視点でエネルギーを使っていけばいいのでしょうか。

参加者

少欲知足という精神が一番大事だと思います。檀信徒はもちろん、坊さんにも言わなきゃいけないと思います。裕福なお寺は、グリーン車やベンツに乗っています。そう言う態度で少欲知足と檀信徒に言っても説得力がありません。僧侶側も口ではなく行動力でしめさなければなりません。

また、戻ると言っても、三十年前どころか三年前のスマホのない時代戻れと言うのも無理でしょう。であるなら、有るものを省エネ化していくしかないでしょう。昭和三十年代が良かったと言った話がありましたが、「自分が若いころは良かった」と言うのは人類がずっと言い続けてきたことでしょう。例えば、中学生の息子も、パソコンや携帯があつて当たり前前の時代でほとんど体を動かしません。もっと体を動かせばいいと思うのですが、おそらく、新しい世代的事は、それに追いつけない世代の人間には理解できないのでしょうか。全体的に欲望を抑えるという方向でやるしかないのではないのでしょうか。

座長

エネルギーの問題になると、いつも少欲知足に落ちてしまいがちです。だから、できれば少欲知足という言葉は使いたくありませんでした。しかし、お寺としての究極の答えであることは間違いないと思います。オピニオンをまとめるにあたっては、入れて行かなければならないと思えました。

参加者

お寺で檀家さんに伝えられることで、家庭レベルでできることは「気づき」だと思います。気が付かなければ、いくら高度な文明が発達しても、幸せは実感できないと思います。あるお寺に「履物をそろえると心もそろう。心がそろうと履物もそろう。脱ぐときにそろえると、履くときに心が乱れない。誰かが乱して置いたら、黙って揃えておいてあげよう。そうすればきっと世界中の心もそろうでしょう」と言う張り紙がありました。他宗の僧侶の言葉ですが昔はこういう口伝が家庭にありました。それが今は家庭の中で過剰な気遣いで、子や孫に戒めを伝えられなくなり、戒めに対して鈍感になってきました。あるいは、自分の葬儀を子供に遠慮して、子供ができる範囲でやってくれればいいといっています。戒めに鈍感になった子供たちに、家庭レベルで教えていかなければならないと思います。草の根的な運動ですが、それが、低成長で持続可能な世界につながるのではないのでしょうか。

運営

文明の発達と共に、人と人の出会いが軽薄視されているというのは間違いなくあると思います。欲が増えれば増えるほど人のつながりがなくなります。人と人の出会いこそがキーポイントではないでしょうか。物欲主義によって、人と人の付き合いがなくなりました。引越しても隣の人すら知りません。公園に子供を遊ばせることもできなくなりました。便利になればなるほど人のつながりが軽薄視されていきます。ツイッターやラインの発達で、直に話す事もなくなってきました。そうではなく、直にあって話し合う、人と人がつながると言うことが大事だと思います。

問題提起

そろそろ時間も少ないので、私も意見を言いたいと思います。

今あるものが五十年後もあるとは限りません。自明な物が自明で無くなる訳です。つまり、今ある電力会社がなくなくなるかもしれません。私の理想ですが、町内会の発電所、エネルギーの地産地消、お寺での発電所、などが出てくるかもしれません。

一方それに対して、自明なこととしては、セシウムは五十年後も消えません。除染をしても消えません。今の福島の苦しみはずっと続きます。むしろ、忘れられると言う事を恐れるべきです。ですから、「福島の愚かさ悲しさを永遠に忘れない」というオピニオンはどうでしょう。そしてそれをプラスに働かせることが大切だと思います。

他にも、「仏教者が幸せづくり、生き方づくりの担い手に」「みんなで楽しく文化とスポーツ」「お寺をお年寄りと子供の樂園に」などもオピニオンとして提案したいと思います。

座長

これ以上あまり意見も出ないようなので、これまでの話をまとめて、オピニオンをまとめたと思います。

提案されたオピニオン案

「成長主義を見直し、小欲知足を自ら実践していこう」

「温故知新をふまえて見失ってきたことに価値を見出していこう」

「無駄と思われてきたことにこそある価値を見出していこう」

「福島の愚かさ悲しさを永遠に忘れない」

「フクシマを忘れない」

「原発による将来への負荷を忘れない」

「仏教者が幸せづくり、生き方づくりの担い手に」

「みんなで楽しく文化とスポーツ」

「お寺をお年寄りと子供の楽園に」

「檀信徒と共に省エネをしよう」

これらを元に、議論を行い、オピニオンにまとめた。

二、まとめ

第Ⅱ分科会では、「成長主義を問い直す～五十年後のエネルギーと宗教者～」というテーマで議論を行った。中央
教研では、一昨年、昨年と原発の問題を扱ってきたが、第Ⅱ分科会ではそれを受けて、原発の問題も合わせて議論を
した。

一日目は、過去五十年間で、現れた／消えたもの、良かった／悪かったものを、マトリックス図を使い分類したと
ころ、インターネットが現れてよかった、自然が消えてまらなかったなどの問題が提示された。

二日目は、将来五十年で、現れる／消えるであろうもの、良い／悪いものを、マトリックス図を使い分類し、消え
る良いものを消えないようにし、現れるであろう悪いものを消すような方向で、オピニオンをまとめ、次の五つのオ
ピニオンを全体会議で提案する事にした。

「成長主義を見直し、小欲知足を自ら完成していこう」

「温故知新をふまえて見失ってきた価値を見出していこう」

「無駄と思われてきたことにこそある価値を見出していこう」

「原発による将来への負荷を忘れない」

「地域の人々や檀信徒と共に省エネを楽しもう」

第Ⅲ分科会〈現代教団部門Ⅰ〉

五十年後のお寺と女性たち

□運営について

座 長 松田英秀

問題提起 鈴木是妙

助言者 星光喩

記 録 延本妙泉・山田孝行

運 営 中村龍央・鶏内泰寛・齋藤宣裕・野村佳正

第三分科会は二十八名の参加者で、櫻井義秀先生の基調講演「人口減少社会と現代宗教の課題」から予測される未来を認識し、その上で五十年後のお寺と女性、とりわけ①女性信徒、②寺庭婦人、③女性教師の五十年後の在り方を考える。

分科会の運営は、五人一組とし、四つのグループを作り、フレームワークを行った。新たな試みとして①～③のテーマごとに、参加者から広く意見を出して頂くためにブレインライティング法を用い、意見の集約を図るためにペイオフマトリクス法を用い、更に意見を現実化していけるように深みを加えるためにマンドラート法を用いた。各テーマに沿ってグループで深めた意見を発表頂き、「五十のオピニオン」を取捨選択した。

今回行ったフレームワークについて次に列記する。

ブレインライティング法……五人一組のグループの全員に五行二列のマス目用紙を配布し、各々に二分で一意見を書いてもらい、二分経過したら進行側が合図をし、用紙を右隣の参加者に送ってもらう。同じことを繰り返して、全員の用紙が一回りするようにする。そうすることで、十分間で一人が五意見を出すこととなり、グループでは二十五意見が出されたこととなる。(更に意見がある方には、予備欄に意見を書いてもらった。)今回は、次のペイオフマトリクス法の事を考え、意見は付箋に書き込めるようにした。

ペイオフマトリクス法……ブレインライティング法で出た意見の集約を図るために、グループ内でまとめ役を決めペイオフマトリクス法を行った。模造紙にX軸に現実性(簡単・困難)をとり、Y軸に効果(大・小)をとり、自分達の意見がどこに位置するかをまとめ役が中心となり、意見の座標を示した。今回は、その中から効果が小さい意見を除外し、効果の大きいとされる意見から二意見を選択する。

マンダラート法……ペイオフマトリクス法で二つに絞った意見を具体化するためにはどうしたらいいのかを考えるためにマンダラート法を行った。模造紙に三行三列のマス目を取り、主題となる意見を中心に据え置き、この意見を具体化するにはどうしたらいいのかという意見を残りの八マスに列挙し、意見に深みを持たせ、より良いものとする。

□問題提起の意図

本宗に於ける女性に関連する問題について現状把握を行い、人口減少社会、超高齢社会の中から起こるであろうと予測される生涯未婚率の増加、女性祭祀者の増加などを踏まえ、五十年後の未来予想図を描き、それに対し、今からできること、取り組みなくてはならないことを考える。多くの参加者から自由闊達な意見を出して頂く。

□基調講演との連続性

基調講演「人口減少社会と現代宗教の課題」では、日本の人口推移、出生率の低下、社会保障給付費の増大について推移表から現状と未来予想が示された。また、国民生活白書から日本のGDPはコンスタントに上昇しているが、生活満足度は減少していることが示され、経済が豊かになる事が必ずしも幸福度には直結しないことが明示された。その上で幸福度を上昇させることが宗教の活路であると分析された。現代の人々の求め、願いのありかを理解し、その地域の特有性を活かしながら活動して行くことが寺院に求められていることであると提案された。

基調講演に加え、宗門の宗勢調査の結果で初めて檀信徒が減少したと回答した寺院の数が、檀信徒が増加したと回答した寺院の数を上回ったことが示され、宗門の未来が必ずしも明るいものではないことが提示された。また、日本政府は、女性の社会進出をさらに推し進め、二〇二〇年までに女性の指導的地位を三〇%にすることを宣言している。当然宗門にもその影響は現われるであろうことから、参加者が現状に危機感を持ち、日蓮宗を取り巻く女性、とりわけ女性教師、寺院婦人、女性信徒が今後の宗内で担う役割を鑑み、五十年後の未来を描いたのではないだろうか。

□分科会討議

当分科会において参加者から出た、テーマ①～③の十二の意見を次に挙げる。その意見に伴う背景も示す。また、各テーマにおいて出されたその他の特筆すべき意見も列挙する。

テーマ①、五十年後の女性信徒はどうなっているか？また、そのためにはどうすればいいのか？

意見 カフェやカルチャーセンター、寺子屋を提供し、お寺で女子会などを行い、女性信徒のネットワークを構築

できるような開かれたお寺を目指す。

背景 女性信徒の増加が考えられるので、女性信徒がお寺に来やすいように女性信徒が興味のある事業を行い、女性信徒のネットワークを構築し、お寺を活性化させていく。

意見 寺内に育児施設を設け、子供連れでお寺に来てもらえるような環境を整える。それにより、子供と一緒に祖父、祖母にも寺院に足を運んでもらう。

背景 お寺の育児施設で参拝中の子供の面倒をみることによって、女性信徒の育児負担を軽減し、お寺が来やすい場所となるようにする。そうすることで、子供と一緒に、父親、祖父母の参拝増加へと繋げることが出来るのではないかと。

意見 一人暮らしの人が生活できるグループホームを作り、生前だけでなく亡くなった後の供養を含めてケアを行うことで、信徒となってもらう。

背景 女性の独身者が増加するので、お寺が生前、死後を含めてケアしていけるグループホームを開設し、ケアをしていく。

◇テーマ①における、その他の意見

- ・女性の社会進出により、精神的に悩む女性信徒が増え、夫婦問題など自分主体の相談が増加。自死者の増加。
- ・今のままの檀家制度では、女性信徒も減少する。
- ・お寺への参拝が減り、メールでお寺と繋がっている。
- ・信徒感が無く、宗派という存在価値がなくなり、宗教という括りになる。
- ・役職に就く女性信徒の増加。女性の社会進出の増加により、女性信徒の減少。
- ・女性信徒の総代が増え、女性主体の寺院づくりが進む。

・女性信徒の高齢化が進み、送迎サービスが求められる。

テーマ②、五十年後の寺庭婦人はどうなっているか？ また、そのためにはどうすればいいのか？

意見 宗門が主体となって華道や茶道の師範資格を有する寺庭婦人を養成し、カフェサロンや文化サロンを寺院で開けるようにする。

補足 寺院を有効活用するために、宗門が主体となり資格を有してもらい寺院の活性化を図る。

意見 カウンセリングやインターネット等の寺院運営に必要な研修を積んでもらい、住職の補佐が可能な寺庭婦人を育成する。

補足 寺庭婦人が寺院運営に積極的に参加してもらえるようにカウンセリングやインターネットなど学んで頂く機会を設け、住職を補佐し寺院運営を円滑にしていく。

意見 「きれいな寺庭婦人グランプリ」などを開催し、寺庭婦人が憧れの存在となるようにする。

補足 お寺は大変だからお寺へ嫁ぎたくない、嫁がせたくないという話を聞くことがあるので、清廉で利他に生きる寺庭婦人のことを知ってもらい、憧れの存在となるようにしていく。そうすることで、寺院の寺庭婦人の増加と寺院活性化に繋げていけるようにする。

意見 宗門でカリスマエスティシャンを育成し、寺庭婦人がエスティシャンとなり寺院で運営する。その中でオリジナル商品を開発し販売する。

補足 小規模寺院では生活が大変であるという現状があるので、宗門が主体となり寺庭婦人に資格を有してもらったことで寺院を活性化する。

◇テーマ②における、その他の意見

- ・ 寺庭婦人としてだけではなく、二足以上の草鞋を履いている。
- ・ 女性の社会進出などで、お寺を離れ、週末婚のような状態。
- ・ 全国的に和讃が盛んとなり、檀信徒の指導に多忙を極めている。
- ・ 女性特有の悩みというものに寺庭婦人が対応する。
- ・ 寺庭婦人の生涯出生率の低下が生じる。
- ・ 檀信徒の相談に乗れない寺庭婦人の増加が生じる。
- ・ 寺庭婦人の役割が、法務のできる坊守さんのように変化する。
- ・ お寺での婚活が盛んになり、仲人的な存在になる。

テーマ③、五十年後の女性教師はどうなっているか？また、そのためにはどうすればいいのか？

意見 宗制の見直し、宗門機構改革を行い女性教師が宗会議員、宗務総長等の要職に積極的に登用できるようにし、活躍してもらう。

補足 社会での女性登用の流れを踏まえ宗門でも宗政を見直し女性を登用しやすいようにして、女性目線の考え方をなどを宗門に反映できるようにしていく。

意見 宗門を挙げてオーディションを行い様々なタイアップをしながら「宗門のアイドル」を育成し、広報活動を展開してもらう。

補足 日蓮宗の教義をしっかり理解した女性教師を「宗門のアイドル」的存在として育成し、色々な面でタイアップしつつ日蓮宗の教義が正しく広まるように広報活動に尽力してもらう。

意見 外国人女性教師の育成をサポートし、国内外での布教に活躍してもらう。

補足 今後、当然に外国人女性教師の増加も考えられるので、育成や布教活動のサポートを行って国際開教の活性化に繋げていく。

意見 有名ファッションブランドとコラボをし、女性教師がデザインを企画したりして、オシャレな作務衣、数珠、法衣等を作成し、沢山の人の興味を持ってもらえるようにする。

補足 女性教師が自分達が着たい、使いやすいついた作務衣などをデザイン、制作することによって、一般の方にも興味を持ってもらい、女性教師に目を向けてもらえるようにする。

意見 女性教師が女子会を開催し、気軽に相談を受け、情報交換できる場所を作る。

補足 女性教師が主体となって女性檀信徒などと女子会を開催し、悩みの相談や生活情報の交換ができる場を作り、交流の輪を広げていく。

◇テーマ③における、その他の意見

- ・有髪の女性教師の増加。
- ・政治世界への進出。
- ・女性修法師の誕生。
- ・女性教師の住職が増加。夫は外で仕事に就く。
- ・人材育成のマネージメントをしている。

□まとめ

初めて行うフレームワークに対しルール説明を行ったが、参加者全員が十分な理解には至らず、実際に行いながらフレームワークの手法を理解して頂いた。その為、各テーブルにアドバイスをする運営側のスタッフが必要であった。

ブレインライティング法に入った頃には、各グループでの会話も増え、まとめ役が中心となり作業が行われた。今回は、ブレインライティング法、マンガラート法の模造紙からテーマが終わる度に付箋を剥がして模造紙を使いまわしたが、選出された意見以外にも素晴らしい意見が見られたので、その都度模造紙を用意し、作業の終わった模造紙をそのまま保管できるようにすべきであった。

テーマ①、②は一日目の分科会で論議され、その意見は十年先に起こりうるような実現感の強いものが多く、今回の主題である五十年先という未来に飛躍した意見が少なかったように思える。二日目は、その反省から五十年先の意見であるのもっと想像力豊かに意見を出してもらえるように、運営側が分科会開始当初にさらに促した。その為、テーマ③においては、より想像性にとんだ意見が多かったように思える。主題を認識してもらえるように、分科会中に何度も運営側から促す必要がある。

最後にグループ間で出た意見を各グループのまとめ役の方に発表してもらったことで、グループ間の意見が共有され分科会全体の一体感が生じた。

今回は、フレームワークを多用した分科会であったが、意見を短時間で集積し、またその意見を取捨選択し、さらに深めるといふ試みとしては非常に良かったのではないだろうか。ただ、分科会そのものの全体時間が短く当分科会ではテーマを三つ扱ったことで、十二分に意見を深めるまでには至らなかったと言える。全体の時間の中で、どのようなフレームワークが有効なのかを十分に考慮し使い分けることが必要と言える。

□おわりに

当分科会においては、「五十年後のお寺と女性たち」というテーマで議論を行ったが、中央教化研究会議への参加者の特徴上、当分科会への女性教師の参加は一名、運営側の三名を含めても四名であった。その為、男性教師側から捉

えた「五十年後のお寺と女性たち」となってしまったことは否めない。是非とも、女性教師の積極的な当会議への参加を求めるところである。

また、フレームワークを行う上で当初のルールから前向きな意見の中で論議を進めた。これにより、眼前の人口減少、超高齢化等の中にマイナスイメージばかり見て寺院の将来を悲観するのではなく、良い点をより良いものとして捉えることができたのではないだろうか。また、多くの意見を集積できたことで、普段思いもつかないような意見も見られたのではないかと思う。五十年後という遠い先の事に思えるかもしれないが、決して予測のつかないような時間ではない。五十年後の社会や人たちが安穩に生活して行けるように僧侶が尽力し五十年後に向けて今からできること、取り組みまなくてはならないことを真剣に考え、絶え間ない努力をすることが祖願達成の礎になるのではなからうか。

また、宗報に「五十のオピニオン」が掲載され、その記事をお読みになられた方から貴重なご意見を頂いた。それ故、「五十のオピニオン」が出てきた経緯が解り易いように補足という形で注釈を入れさせて頂いた。この度の宗政調査により檀家数三百件を境に、檀家数の増減が顕著に表れた現状に於いて、参加者同士がどのように寺院に人を引き付けるか、寺院を活性化できるのかを考えた中から出てきた意見であることをご理解頂きたい。

五十年後の寺院と宗門をデザインする

□運営について

座長 河崎俊宏

問題提起 原一彰

助言者 田澤元泰

記 録 坂輪宣政・山口功倫

運 営 小林康洋・池浦英晃・馬渡竜彦・石原顕正・成田東吾

第Ⅳ分科会は参加者三十四名。問題提起の後、座長が参加者名簿を読み上げ、最低限の自己紹介と、時間の短縮を図った。さらに、参加者を二つのグループに分け討議を行った。その方法は、五十年後への提言として、自身の考えをポストイットに記入してもらい、①総人口の減少と地方自治体の消滅、②超高齢社会、③少子化と家族形態の変化、のテーマ別にホワイトボードあるいは壁面に用意した模造紙に貼り付けてもらうという作業である。それぞれのグループの座長が、貼られたポストイットの内容を分類しながら、記入された内容を参加者に発表してもらうというものである。書き込む時間を区切り、参加者自身の意見を整理して書き込むことにより、発表にかかる時間の短縮、他者の意見を貼り出すことによる情報の共有化をしようという試みであった。五十年後の将来予測、予想されるシナリオ

を前提とし、それぞれ教師・寺院・宗門ができること、しなければならぬことを提言として募った。ある程度問題を絞り込んだことで方向性が保たれ、発言の時間は決して多くはとれなかったが、意見提言として、百八十という数多くのポストイットが貼り出される結果となった。

□問題提起の意図

本格的な人口減少時代を迎え、五十年後の日本は、総人口、労働力人口の減少による経済活力の低下、地方における地域社会の消滅、公共施設の維持不能、年金・社会保障システムの崩壊、等の問題に直面することが見込まれる。政府は「人口急減・超高齢化」の克服を課題として取り上げ、安定的な人口構造の保持を目標とし、女性や高齢者の就業率向上、少子化対策、外国人労働者の活用、都市のコンパクトシティ化など様々な方針を示した。五十年後を見据えると、日本の社会は大きく変動することが予想される。この変動に対し、寺院や宗門の在り方も大きく見直さなければならぬ。日蓮宗教師は、何ができるのか、何をしなければならないのか、寺院や宗門はどのように変わって行かなければならないのか、あるいは変わってはいけないのか（問題提起文より）。

そこで本分科会は、「日本の将来推計人口」（平成二十四年一月推計）国立社会保障・人口問題研究所「ストップ少子化・地方元気戦略」（平成二十六年五月）日本創成会議・人口減少問題検討分科会、「国土のグランドデザイン二〇五〇」対流促進型国土の形成」（平成二十六年七月）国土交通省、等の様々な将来予測・方針を前提として、次の三つのテーマ

- ① 総人口の減少と地方自治体の消滅
- ② 超高齢社会
- ③ 少子化と家族形態の変化

を取り上げ、それぞれ「寺院、宗門への影響」とそれに対する「教師・寺院・宗門ができること、しなければならぬこと」を五十年後への意見提言として取り纏めていくことを目指した。

□ 基調報告・基調講演との連続性

基調報告からは日蓮宗、寺というものが歴史的にどう変容してきたかということ踏まえ、また今後どこに人々の求めがあるのかといった観点、また基調講演「人口減少社会と現代宗教の課題」で示された現代仏教が直面する課題、葬送儀礼の変容や直葬・檀家にならない人々の存在、また護持会費・布施が当てにならない寺、さらに経済的困難、檀徒の流出、後継者の確保といった過疎地の寺院をどう考えるかといった問題は直接的に本分科会討議に関連するものである。現代仏教は何を目標せばよいのかという問い掛けは、五十年後を考えるうえで、今直面している問題点をどう克服していくのかという点で分科会討議で出された意見に反映されていた。

□ 分科会討議（まとめ）

問題提起を踏まえ、参加者の属する地域性、各々が抱く未来像による意見が数多く寄せられた。

○ 国内の外国人への布教教化（国際結婚、移民への対応）

・ 外国語を話せる教師の育成 ・ 開教師の国内での活用 ・ 外国人教師の育成 ・ 外国語引導文の導入

○ 兼業教師の支援

・ 教師の資格取得支援（保育、教育、介護……） ・ 教師の起業支援（資金、ノウハウ……）

○ 在家、一般の方の登用、活用

・（仮）准教師制度を設けて過疎地寺院で登用 ・ 寺庭婦人を代理住職として活用

○寺院の多機能化

- ・地域の公民館機能
- ・地域にひらかれた寺院づくり
- ・幼稚園、保育園、介護施設等、公共・公益施設の併設
- ・レストラン等特色のある機能
- ・墓地形態の多様化への対応

○農山漁村活性化の核となる寺院づくり

- ・脱都市生活者の受け入れ体制の整備
- ・山岳修行等、一般の方の体験、滞在機能の強化

○寺院の統廃合やM&Aによる連携強化

- ・代務寺院の活性化
- ・宗門、法縁、管区による寺院運営
- ・宗門による後継者の派遣

- ・過疎地寺院の都市部移転
- ・寺院のコンパクト化

○宗教教育の普及促進

- ・寺子屋教育の推進
- ・養子縁組推進による絶家防止（先祖供養の重要性から）

- ・人工妊娠中絶の抑制による少子化対策

○宗門史跡・拠点の活性化・新設

- ・既存宗門史跡の活性化
- ・巨大建造物（仏）の建立
- ・日蓮宗の理想に基づく新都市建設
- ・未信徒が参拝しやすい巡礼ルートの開設
- ・インド霊鷲山に宝塔、戒壇建立
- ・月面の題目塔建立

○日蓮門下の大同団結

- ・日蓮系宗派の統合
- ・日蓮系新興宗教信者の吸収

○宗門美術館の建設

- ・宝物等の適正管理、一般公開

○檀信徒の信仰継承

・エンディングノート作成支援 ・現在帖の作成

・教師、寺庭婦人による檀家の定期的訪問（月回向、孤独死防止他） ・分家への本尊授与

・子、孫世代への布教強化 ・寺に來ない現役世代に対するIT布教（SNS等）

○スーパー教師の育成

・専門分野に特化した教師の育成 ・高座説教師から人間国宝を

・教師の基本能力、人間力（アナログ）の強化 ・子弟教育の強化（信行道場一年化）

○未信徒、外国人にアピールできる瞑想法の確立

○寺院、教師の独自の取り組みへの支援強化

・資金のある寺院からアイデアのある寺院へのファンディング制度

○宗門機構の改革

・多様な意見を取り入れるための宗会二院制

・宗門の課題に対する全教師による直接投票制度の導入

・教区、管区の機能縮小、宗務所の簡素化 ・本宗存続のための特別機関設立（教師プラス一般の専門家）

□おわりに

人口減少時代に対する危機感は参加者がそれぞれに持ち、ある程度事前に考えをまとめていた様にも感じられた。

比較的若い世代の参加者が多かったこともあるのだろうが、固定観念にとらわれずに奇抜な発想で「デザイン」していただいた。その実効性はともかく、将来こうなっていて欲しいという願望や、原点に立ち戻り考え直す向きの意見

もあり、多種多様な意見が出されたことは一定の目標を達成できたと言える。しかし、今回取り上げた将来予測やシナリオはあくまで現時点での想定に過ぎず、流動する社会の変化を敏感に察知し、適切に策を講じなければならぬ。勿論、我々日蓮宗教師は皆婦妙法の祖願達成に精進することを本誓とし、宗団の和合と興隆とを念願する堅固な信仰に基づくことを忘れてはならない。本分科会でのオピニオンが五十年後の寺院、宗門を形作るための嚆矢となり、社会にとって無くてはならない存在となった五十年後の寺院・宗門の姿に期待したい。